

図5 シャンゼリゼ大通りからの夜景



図6 使徒ヨハネとイエス
(最後の晩餐の一部)



図7 生月島寺部地区の御前様

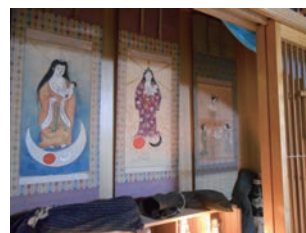


図8 生月島山田地区の御前様

のパリ・ミッション教会によって設立された教会が長崎県の大浦天主堂であり、その後、日本キリスト教史における重要な出来事である「信徒発見」がおこなわれたのもこの大浦天主堂である。

パリ・ミッション教会は再布教活動を大変熱心におこなっていたといわれている。今回、パリ・ミッション教会の本部での資料調査をおこなう機会もあった。そこには明治期に日本に派遣された宣教師たちの記録が残されており、今後の追跡調査の良い資料を得ることができた。本派遣の研究対象であった、生月島山田地区の「御前様」は、調査の結果、「再布教時にこの島にもたらされたものである。」ということ を考察しうる、という結果になった。しかし、どの会派がもたらしたものであるのか、何に基づく絵なのか、ということは結論付けることができなかった。今後、調査を進めることで、かくれキリシタン信仰と、パリ・ミッション教会との関係性も明らかにできるのではないかと考えている。

今回、フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センターへは、12月22日～1月11日という期間の中で

伺った。年末はヴァカンス期間と重なったこともあり、高等研究院自体は閉館していたが、指導教官であるキブルツ先生により、研究院へ入館するパスワードと鍵をお借りすることで、自由に研究院へと入り、資料調査をすることができた。また、パソコンや印刷機も自由に使えるよう許可していただき、当初の予定よりも資料調査を進めることができた。

しかし、調査終盤である1月7日に世界を驚かせたシャルリー・エブド社への襲撃事件が起きてしまった。各施設や、交通機関が厳重な警備体制となる中、調査をおこなうこととなった。

国と国、文化と文化、そして、信仰と信仰の対立と摩擦によって引き起こされた今回の事件を、偶然にも現地 で体験することとなった。そこからは、かくれキリシタン信仰も様々な歴史的・社会的背景のもと、現在の姿を残しているのだということを再認識することとなった。

広東省広州市中山大学への派遣調査

鍋田 尚子
(歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程)



2014年10月20日から11月9日まで中国の広州にある中山大学に3週間滞在し、灶神の調査をおこなった。私の研究対象は、ベトナムの灶神である。灶神はベトナムではオンタオと呼ばれる。なぜ広州の灶神を調査するかというと、ベトナムには広州・潮州からの移民が多く会館も建てられており、南部ホーチミンにあるチョロン(中国人街)には多くの広東人が暮らしていることから、広州周辺の灶神を調査することでベトナムのオンタオにどのような影響を与えたかを研究することができると考えたからである。

とはいえ、広州は初めて。土地勘もなく言葉もほとんど話せない。どのような調査ができるのかと出発前はとても不安だった。しかし、この3週間は自分でも驚くほ

ど充実した内容の濃い時間となった。広州に着いたときから最後まで多くの人々に助けられ続けた。空港に到着すると、チューターの劉成澄さんが待っていてくれた。ホテルのチェックインを済ませ、大学に行き指導教員へのあいさつを終え、事前に連絡をもらっていた劉先生の研究室に行く。劉先生はすぐにどんな調査がしたいかを私に尋ね、色々と考えてくれた。そして距離が遠いからとあきらめていた潮州調査が最初に決まった。それも「明後日から潮州に行きなさい」と劉先生から私のチューターに連絡が入り、私たちは急いで列車を予約し現地向かった。私が調査できたのも楽しく充実して過ごせたのもチューター劉成澄さんのおかげである。彼女は公務員試験目前の大変なときにもかかわらず、急遽1泊調査



写真1 潮州 祭灶神
農曆閏9月1日
(2014年10月24日)



写真2 佛山市南海區 灶神 字牌
「定福灶君」



写真3 中山大学圖書館



写真4 潮州 牌坊街

に同行することになり、その後も色々私を助けてくれた。

潮州では劉先生の友人である李先生とそのご友人がずっと一緒にいて世話をしてくれた。急に潮州調査が決まった理由は、農曆閏9月1日の祭灶神を李先生が私に見せてくれるためであった。本来は閏月のため行わないものを、わざわざ私のために見せてくれたのである。豪華な供物を用意して。潮州は人も食べ物も芸術も非常に素晴らしい。私は潮州がとても気に入ってしまった。いつか機会があったらもっと時間をかけて調査してみたい。

次は、佛山市南海区の伊洛村で調査を行った。広州にある(農)村の人々の灶神を見たいという私の話を受けて、劉先生が博士課程の程さんの出身地を紹介してくれた。程さんの案内で程さんの実家や近所の家の灶神を見せてもらった。お昼は程さんの家でご両親と一緒においしい昼ご飯をいただいた。潮州でも伊洛村でもカメラ(食べる食べる)攻撃であった。お腹いっぱいと言っても食べなさいと勧めるのは、ベトナムも沖縄も広州・潮州も同じであった。私はいつもと同じく断れず最後までひとりで食べ続けていた。伊洛村の調査は灶神だけでなく、中国の村を知るために非常に学ぶことが多かった。祠堂や土地神、屋敷神、ベトナムの研究をするためには中国の村や家を知ることは重要なのだと痛感した。

また、帰国の2日前には、佛山市龍江鎮の文化局の張

先生に話を聞く機会を得た。ここは、私が図書館で地方誌資料を整理して行きたいと思った場所である。ここもまた劉先生が連絡をとってくれた。残念ながら私の知りたかったことは得られなかったが、張先生からは貴重なお話を聞くことができた。私が現地調査できたのは全て劉先生のおかげだった。劉先生と会ったのはわずか2回、それも短い時間だった。にもかかわらず、いつも劉先生はチューターや先生の学部生たちを通して私の調査を色々気にかけてくれていた。

調査でないときは博物館を巡り、それ以外はほとんど中山大学の図書館で過ごした。食事ほぼ学食。中山大学にただで充実していた。なにより図書館が素晴らしく私のお気に入りの場所だった。窓側の緑の見える場所にいつも座っていた。この図書館も最初は利用カードを作るのに半日以上を費やしてしまった。チューターと2人がかりで手続きを済ませやっと利用できるようになった。学食用のカード作りには2日ほど労力を使ったが、結局断念してチューターの学生証を借りることにし、毎日学食を利用していた。

あっという間の3週間であった。色んな人にも出会えた。出発前に小熊先生や同じ博士課程の程さんが紹介してくれた方たちにも会うことができ、とても親切にしてもらい本当に楽しい時間を過ごした。中山大学で出会った言語研究者の日本人からも色々な話を聞かせてもらった。改めて出会った方々に感謝をしたい。この縁を大切にこれからの自分の研究に活かしていきたい。

サンパウロの熱と日系社会の温もりを感じたブラジル調査

松下 里織
(歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程)



海外移住資料館で展示ガイドをしている私にとってブラジルは憧れの国であり、また日本人移民の歴史の語り部として必ず一度はこの目で見なければならぬ場所だと思っていた。そのブラジル(サンパウロ大学日本文化研究所)へ非文字資料研究センターの若手研究者として

行く機会をいただき、2014年9月24日から3週間ほどサンパウロ調査を行った。

サンパウロ滞在中、私は毎日泣いてばかりであった。それは言葉が分からない国に来てしまったという不安などから来るものではなかった。ただただ、感激と感動で